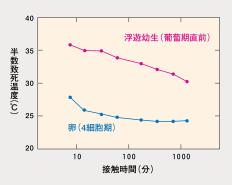
具類の温度耐性〈3〉

海生研では、貝類について様々な試験研究を行っています。

岩礁域に生息するアワビは、卵からふ化したばかりの 幼生の時期には海水中を浮遊する生活を送ることから、 いろいろな環境変化にさらされる可能性があります。

図は、クロアワビの卵と浮遊幼生の温度耐性を調べた結果です。横軸は高温に触れている時間、縦軸は半数が死亡する温度です。死亡する温度は、高温に触れている時間が長いほど低下すること、受精後まもない卵の時期が高温に弱いことがわかりました。





財団法人海洋生物環境研究所は、発電所の取放水等が海の環境やそこに生息する生物に与える影響を科学的に解明する中立的な調査研究機関として、農林水産省、経済産業省、環境省の共管のもと、昭和50年に設立されました。

これまで「大規模発電所の取放水が生物に及ぼす影響の解明」「取放水域の環境調和技術の開発」「原子力発電所等周辺海域の海洋放射能調査」 等の調査研究を国や民間からの委託をうけて実施しております。

海の豆知識 第13号

平成14年10月1日 発行

発行所

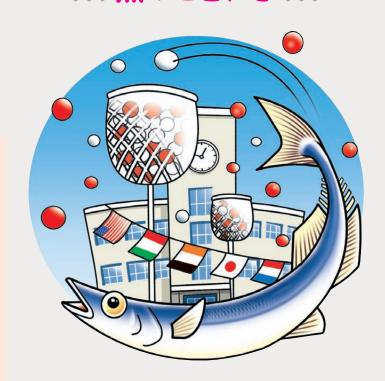
財団法人 海洋生物環境研究所

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3丁目29番地 帝国書院ビル5階 〈お問い合わせ先〉

電話 03-5210-5961/FAX 03-5210-5960 <ホームページ> http://www.kaiseiken.or.jp/ かいせいけん



? ? ! 魚のことわざ ? ??



嬲海洋生物環境研究所

魚のことわざ (その12)

海とその生物にまつわる。諺や格賞についてお話しましょう。

今回のテーマはサンマ(秋刀魚)です。

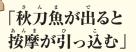
【分類】 ダツ目サンマ科、(体長) 40cm

【分布】日本から北米にかけての太平洋に広く分布する

【特徴】春季水温の上昇とともに北上・索餌回遊を行い、夏季には道東から千島列島沿岸の親潮域・オホーツク海に達し、成熟の進展にともなって南下。寿命は1.2~1.5歳

秋の大衆魚といえばサンマ。しかし、サンマが庶民の味として広まったのは江戸の後期と新しく、本格的に定着したのは明治近くであるらしい。それまでは、下魚として扱われ、食べることよりも脂を取るために利用されていたという。

目が澄み、体が銀色に輝きながら反り返っているもの、口の先が黄色くなったものが脂が乗り、新鮮なサンマの証。



「秋刀魚は秋の使者」ともいい、栄養価が高く食欲の秋にこれを食べると体力が整い、按摩にかかる必要がなくなる。(江戸時代の諺、「秋刀魚は按摩泣かせ」ともいう。)



「秋力魚は営黒に限る」

場違いのものを誉めることにいう。三代将軍徳川家光公が鷹狩に行き、その日は獲物が多く日暮近くまでかかった。空腹に耐え兼ねて近くの目黒の茶屋に突然立ち寄り、店の主人があわてて出した焼いた秋刀魚の味が忘れられず、後日お城で所望したが目黒の味には遠く及ばず、さんまは目黒に限ると嘆息して言ったという。この話しは落語の「目黒のさんま」ほか諸説がある。